

上村忠男編訳

『国民革命幻想』

—デ・サンクティスからグラムシへ—

(未来社)

アントニオ・グラムシ著 上村忠男編訳

『知識人と権力 —歴史的・地政学的考察—』

(みすず書房)

同じ編者による二つの書物は、まさに過ぎ去

ろうとしている二〇世紀という世紀のイタリア思想史を相異なる角度からクローズ・アップした二枚のプロファイルのように見える。一つは縦断面、もう一つは横断面とも言おうか。前者は、*Fare gli Italiani* (イタリア人をつくる) というイタリア語の副題が語っているように、統一後イタリアの合い言葉となった「国民づくり」という課題をめぐる大知識人たちの格闘の系譜図、そして後者は、アントニオ・グラムシの著作のなか、近年「サバルタン・スタディーズ」という学風を呼び起こすこととなった思想的原点の解剖図に近い。しかしまた、『国民革命幻想』が「国民国家の時代」としての二〇世紀のテーマに即して、それを反省的に考察することに編者の意図があるのに対し、『知識人と権力』は、二〇世紀の思想家のアンソロジーでありながらも、E・サイドやG・スピヴァク

のように、近代の知的パラダイムの転覆をめざす論者たちとグラムシとの間の微妙な接点と脱骨点とを示してくれるような編集ともなっている。ヨーロッパ諸国の中、つねにマイナーとしての扱いをされてきたイタリアという国の思想史の断片から、国民形成と知識人と権力という近代の一大問題を収めていく編者の腕利きは、イタリア史のみならず、思想史全般にかけての蘊蓄を感じさせるに十分である。

まず、『国民革命幻想』から見よう。一九世紀末から二〇世紀前半にかけてイタリア思想界の巨匠たちは、「イタリアはできた、これからはイタリア人をつくらねばならない」というポスト・リソルジメント期の課題にいかに対応したのか、あるいは、どのようにしてこうした課題を自ら背負うこととなったのか。物語は、一八七二年に行われたデ・サンクティスの「学問と生」という講演から始まる。そして、その後殆ど顧みられることなかった講演が、当時のイタリア思想界の二人の大御所、クローチェとジェンティレによって突如忘却の淵からよみがえったかのように取りあげられることとなった事情、また両人の呼びかけが、彼らの影響の下で思想形成を遂げたグラムシやルッソによってどのように受け継がれたのかを編者は綴っている。一外国の思想界の風土が、このように手

にとるように身近に読めるようになっていくことは、すぐれた編訳のために求められる力量はすぐれた著作を産むための能力に決して劣らぬという事実を証し立てている。訳注と解説は、ただ親切な手引きという域を大きく超えて、言葉や物事に潜む独特の歴史的脈絡に目覚める際の知的悦びを覚えさせ、それ自体が読む楽しみを倍加させてくれる。私が編者の本を手取る時、いつも新鮮な知的刺激の連鎖を経験するゆえんである。

ところで、編者が解説の枕に引いているボッピオのいう「イタリア・イデオロギー」、つまり「イタリア人をつくらねばならない」というイタリア知識人の独特の状況認識は、はたして編者がとらえ直したように「国民革命幻想」であったのか。一九世紀前半までは、一つの「地理的表現」に過ぎなかったイタリアが、いくらか多くの未縫合を残しているとはいえ、ヨーロッパ有数の国家として存在するに至ったという事実は厳存するのではないか。ならば、それは国民革命の「幻想」というよりは、「構想」ないし「企画」と呼ぶにふさわしいものではなからうか。このような事実を知らぬはずのない編者は、むしろそれが過ぎ去った幻想であると断言されるようになった戦後の時代にさえ、その企みは生き延

びているという事実注目する。例えば、ジェンティレにおいて最も雄弁な表現を見てとることのできる「国民の教育者としての知識人」という知識人の自己理解は、グラムシのうちにもその最後のこだまが聞き取られるが、ここでは済まない。つまり、このイデオロギーは、『獄中ノート』を国民党づくりにいう事業において恰好の素材として活用した戦後の共産党にも引き継がれているというのである。

確かに、国民革命というデ・サンクティスの取り組みということでいえば、グラムシこそその可能性を最も深く追求しようとした人物であったという編者の指摘は的確である。けれども、デ・サンクティスからジェンティレまでと、グラムシとの間には、この取り組みの姿勢に相違があったのではないか。この相違点はどうなるのであるか。他ならぬボッピオが、戦前の知識人たちの意識世界について「イタリア・イデオロギー」という名を与えるようになったことは、ファシズム世代と自らを含めたポスト・ファシズム世代との間に、断絶よりは連続性を見てとった戦後世代に対する反駁の意匠を込めてであったという事情は、編者が明らかにした通りである。

もし、ボッピオの不満に半分の根拠があるのであれば、似たようなことは、グラムシについ

てもいえるのではなからうか。なぜなら、グラムシは、大きくとらえてクローチエやジェン

ティレと同時代人であるが、しかも彼らの時代を生き残り、いくつかの面では新しい世代の形成にもかかわらずいるユニークな人物として評価されてきたからである。まず、グラムシは、典型的な「マルクス主義者」ではなかったけれども、デ・サンクティスの道徳論にしろ、クローチエやジェンティレの観念論にしろ、それぞれの精神主義とは一定の距離を保っていたという事実が考慮されねばならない。さらに、知識人の役割に対するグラムシの多大な関心をもって、彼をイタリア特有の政治的エリート主義の伝統のなかで位置づける見方は、けっこう根強いが、これに対しては絶えず反論が提起されてきた。つまり、グラムシの知識人論の特徴は、潜在的には「誰もが知識人である」という、知識人そのものについての革新的再定義、そして常識や習俗の名のもとで、まるで毛細血管のよう

にわれわれの意識の中に浸透している知識のあり方自体に対する問いかけにあり、この点で伝統的知識人論とは一線を画しているということである。でなければ、現に反エリート主義の知的企画を代表するようなサルタン・スタディーズ・グループのプロジェクトが、『獄中ノート』から発想を得たという事実は、説明し

難くなるであろう。

もちろん、編者が疑念を抱いているように、グラムシ研究において、クローチエやジェンティレ的「立ち戻り」と相呼応する部分の「隠蔽」あるいは「抑圧」はなかったわけではない。編者は、学問的厳密性の見地から、こうした脈絡を追求しようと並々ならぬ努力を払ってきた。『知識人と権力』に登場する「実践の反転」とか「倫理的な社会」という論争的訳語は、まさにそうした試みの例である。

まず「実践の反転」という訳語から見よう。編者によれば、獄中のグラムシが（エンゲルスの編集になる）マルクスの「フォイエルバッハに関するテーゼ」をイタリア語へ訳した際、第三テーゼに出てくる〈*unwäzende Praxis*〉という言葉を〈*rovesciante praxis*（変革の実践、あるいは革命の実践）〉ではなく〈*rovesciamento della praxis*（実践の反転）〉と訳し、この表現を『ノート』で何度も採用しているという事実は、意味深長である。これは、グラムシのマルクス理解には、ジェンティレの影響があった証拠なのである。

この問題を検討する前に、まずマルクスの初稿には〈*revolutionäre Praxis*〉と書いてあった表現が、エンゲルスの編集によって

〈unwäzende Praxis〉と書き換えられた事実があるが、この場合は何らかの意図的修正であったと見る根拠はない。初稿の〈revolutionäre Praxis〉にしろ、エンゲルス版の〈unwäzende Praxis〉にしろ、対象世界を変化させる実践を通じて、人間自体も変わっていくという趣旨には変わりがないからである。執筆当時、弱冠二十七歳であったマルクスが念頭に置いたのは、当代の唯物論者として名高いフォイエルバッハでさえ、結局は観念論から自由ではなかったということを批判することによって、自らの唯物論への旋回をはっきりさせることであつたのである。しかし、ジェンティールの「実践の反転」となると、これは人間による環境世界の認識と環境世界への実践的働きかけとの間の反転関係を指すこととなり、客観的世界の変革を志向するマルクスの原意は褪色する恐れがある。

問題は、なぜグラムシがジェンティールのこの表現を採用したのかということになるであろう。若きグラムシが、ジェンティールを経由してマルクス主義に接したことは確たる事実であり、のちファシスト哲学者として立身したジェンティールを批判するようになった獄中のグラムシが、依然としてジェンティールの訳語を使っている事情は決して簡単ではない。これは、イタリア観念論哲学とグラムシとの関係に

対する総決算のうえで論じられるべき問題であり、まだそのような決算の準備ができていない筆者には、編者の見解に異論をいう資格はない。ただし、思想の歴史において、言葉の一致が必ずしも内容の一致を意味するのではないということがあるならば、まさにこの場合がそうではないかと思われる。つまり、マルクスがヘーゲル思想のうちに一つの頂点を迎えることとなつた近代の普遍主義的あるいは科学主義的パラダイムをのりこえようとしながら、当代の思想的限界から完全に自由ではなかったのと同じようなことが、イタリア観念論哲学に対するグラムシの闘いにも生じたのではないかと推察されるのである。

つづいて、編者は一般に「市民社会」と訳される〈società civile〉という言葉を「倫理的社会」と訳している。もともと〈società civile〉というのは、西洋においては古代ギリシャにおける市民団の活動にまで遡れるほど、長い歴史をもつた概念である。さらに、少なくともヘーゲル、マルクス、そしてクローチエの思想において、それは決して一様ではない脈絡で使われてきた。例えば、編者の指摘通り、グラムシはクローチエが「倫理的なもの」と称しているものは自分のいう〈società civile〉に該当すると説明しているのである。ところが、日本のジャーナ

リズムでいう「市民社会」は、だいたい国家に対する「市民」の領域、より具体的には「市民運動」の場という意味合いで使われることが多いが、この場合「市民運動」というのは、普通マルクス主義の退潮のなかで現れてきた脱階級的（あるいは脱労働者中心主義的）改革運動を指す傾向があり、ヨーロッパの長い歴史のなかで〈civile〉という言葉に刻み込まれた複雑な含意は言い表せないように見える。したがって、この用語の思想的系譜についての徹底的な考察なしに「市民社会」という言葉を当てることに異議を唱えた編者の思惑は理解できる。だといって、グラムシの〈società civile〉というものを「市民社会」と訳すことは、グラムシからの勝手な流用とは思われない。言葉の系譜や繊細な含意こそ異なつていても、日本の「市民社会」は、日本における様々な従属集団が国家や政府のあり方に介入し、それを変革していく場を指すのであるなら、グラムシのいう〈società civile〉の意味に符合するといえるであろう。逆に、それを「倫理的社会」と訳す場合、（少なくとも、日・中・韓の文化圏では）儒教的伝統における「倫理」というものが帯びている名分的論的、あるいは当為論的な色合いが際立ってしまう、〈civile〉という言葉に含まれた複合

的ニュアンスが出にくくなったりはしないだろうか。

なお、編者はグラムシの思想から、括弧付きでありながら「全体主義」の傾向を読みとっている。確かに編者の指摘通り、グラムシは「時代の子」として、とりわけ第一次大戦後に流行っていた「全体国家論」の影響から自由ではなかった。しかし、「国家崇拜」に対するグラムシの批判からも分かるように、また彼が究極的には市民社会による国家の吸収を展望している点からも分かるように、グラムシの国家論をジェンティレとウーゴ・スピリトのそれと同類のものと見なすことには無理があるのではなからうか。話は少し変わるが、晩年に至ってグラムシがますます関心を注いでいたフォークロアやサルデーニヤ方言についての愛情のこもった考察を見れば、そこに従来の一元的で全体主義的思考の枠組みには収まり切れない発想が潜んでいるということは見逃せない。彼が国家消滅後の状態として想定していた「規制された社会」という概念も、こうした脈絡を踏まえて考える必要がある。となると、グラムシのなかで、当時の思想家なら誰でも持っていたはずの要素にこだわるよりは、時代の課した限界のなかで彼が育んでいた新しさを見いだすことが大事ではないかと思われるのである。

いずれにせよ、翻訳の手際といい、訳注の付け方といい、二冊の本で示された編者のそれはすでに或る境地に至ったといえる。例えば、グラムシの邦訳はすでに数種にのぼるが、『知識人と権力』のようにすんなりと意味が伝わってくる訳文は、これまでなかったような気がする。難解なグラムシの文章が、誤解の余地無く、しかも日本語の語順どおり一気に読み解かれるようになってきている。これは、該当思想家のみならず、当代の知的風土全般についての編者の詳しい識見も手伝ったであろうが、それに先だつて、母語を操る能力や「翻訳」というものに対する並々ならぬ姿勢の美りでもあると思う。

ただし、サイドやスピヴァクに依拠して編者が試みているグラムシの「脱構築」、あるいは「内破」が、あくまでもグラムシのヘゲモニー論に内在したところでの「錬成」となるか、それともグラムシに外在的なものと化するのかは、今後とも絶えず論争の焦点となるであろう。編者が、サバルタン・スタディーズと呼ばれる研究潮流、なかでもその研究の理論的方向性を詮索しているスピヴァクの仕事に注目する理由は、彼女の理論的介入が、単にサバルタン・スタディーズにおける新たな展開に止まらず、フーコーやドゥルーズのようなメトロポリスの批評界の限界を乗り越えようとする斬新な知的

企画であり、さらには編者が近年模索している「歴史のヘテロロジー」との接点を持っているからである。このことは、グラムシ研究の域を超えて、西洋の知性史における編者の長い知的遍歴の到達点として、別途の評価に値するであろう。

そのうえで、サバルタン・スタディーズとグラムシとの関係に話を戻すと、どうなるであろう。この研究が、従来のエリート主義的歴史叙述において抑圧されてきた多様なサバルタンたちの複雑な状況に対し、より繊細な注意を払うようになるうえで相当な刺激を与えたということは事実である。同時に、その研究の動向については、難解で現実応戦力の弱いポスト・モダンズムの洗礼を被りすぎていくということを危惧する声も高い。このような論難の行方は、この研究が、世界的次元で存在するサバルタンたちの現実組織的に介入することを許すような理論的枠組みを提供しうるのか、つまり「実践の哲学」の新たな局面となりうるのかどうかにかかわっていると思う。

(姜玉楚 「カン・オクチョ」・仁荷大学)